

老いをポジティブに受けとめる

上 廣 哲 治

三十年前の三月、東海道新幹線に「のぞみ」が登場し、東京と大阪が二時間半で結ばれるようになりました。今はもう慣れましたが、当時は外の景色があまりに速く流れていくため、それをうまく受けとめることができませんでした。車窓を眺めることは少なくなり、新聞に目を通して見る間に、富士の秀麗を見逃してしまったこともしばしばです。技術革新のおかげで、私たちは速さや利便性といったもろもろの恩恵を受けられるようになりました。しかしその一方で、あたかも車窓の風景を見逃してしまうように、何か大切なことをいくつも置き忘れてきたのではないかと思うことがあります。

「老い」や「死」に対する感受性もその一つです。医療の進歩によって、人の寿命は格段に伸びてきました。もちろんそれ自体は歓迎すべきことですが、老いや死を受けとめる力や、それらを尊重する心情は、どんどん失われてきているように感じられます。かつては家族や共同体のなかで自然に接するものだった老いや死が、今では好ましくないもの、忌むべきものとして遠ざけられるようになっていきます。

仏教伝説に「四門出遊」という話があります。釈迦が若かりし頃、はじめて郊外に出かけようとし

たときのことです。王城にある四つの門のうち、東門を出ると老人に出会い、南門を出ると病人に、西門を出ると死者の葬列に出会います。老・病・死という人生の無常に心を動かされた釈迦がのこる北門を出ると、堂々たる出家者に出会い、そこに自らが向かうべき道を見出したということです。この説話に引き寄せていえば、現代人の多くは、どの門を出ても老いや病や死から目を逸らしてしまい、そこから何かを学ぶ姿勢を失っているのではないのでしょうか。

今年のはじめ、京都市動物園が行ってきたというある取り組みが、テレビで紹介されていました。それは、動物たちの「老い」を来園者に見せることで、何かを感じてもらおうという試みです。

同園には一昨年まで、国内最高齢の「ナイル」というライオンが飼育されていました。老い衰えたナイルの姿を見せることには、来園者から反対の声も上がったといいます。しかし、最期まで懸命に生きる姿を見てほしいという園の方針は、次第に大きな共感を呼ぶようになってきました。ナイルの老いと死は、「自らの人生や生き方を振り返った」「人の死と比較した」「命の大切さや扱い方を考えた」「生きる糧となった」など、さまざまな反応を来園者にもたらしたといえます。おそらく、一頭のライオンの姿を通して、はじめて老いや死に向かい合うことができた人もいたでしょう。

この動物園にはまた、「老人ホーム」ならぬ「老猿ホーム」という施設があります。年老いて群れでの生活が厳しくなったサルを飼育・展示するところで、冷暖房が完備され、バリアフリーのような工夫もされています。ここには、ホームを象徴する一匹のサルがいました。「飼育されている世界最高齢のアカゲサル」としてギネス世界記録に登録され、昨年九月に四十三歳で永眠した「イソコ」です。

ホームでのイソコは、のびのびと暮らしていましたが、老いは確実に進み、認知機能も低下してい

ました。小さな段差も上れなくなり、散歩には常に飼育員が付き添うようになります。イソコの負担にならない範囲で、その姿を来園者に見てもらおうとしたのは、赤ん坊や若い頃のかわいい姿だけではなく、「こうして老いていくんだ」ということを伝えたかったからでした。イソコは一進一退を繰り返しながら、コロナ禍による休園中に亡くなります。精いっぱい生きるその姿を見つづけ、心を動かされてきた飼育員や職員は、その旅立ちを大きな拍手で送ったといえます。

身近な人や動物が齢を重ねて死を迎えるのは、つらいことです。しかし、「寿命」や「天寿」という言葉が示すように、そこには悲しみだけではない、生命を全うしたことへの「寿ぎ」の思いが重ねられるべきではないか——。飼育員の拍手は、そのことを静かに訴えているような気がします。

残念なことに、老いや死に対する寿ぎの感情は今ではほとんど消えてしまいました。速さや利便性を求める経済至上主義の社会では、老人は「お荷物」「厄介な存在」と見なされるようになったのです。

古代ローマの哲学者キケローは『老年について』という著書で、老いにまつわるさまざまなマイナス・イメージを一つひとつ否定し、老いの素晴らしさを謳い上げました。「自然に従って起こることは全て善きことの中に数えられる」という彼は、老いて死ぬことほど自然なものはないと称え、次のように記しています。

「果物でも、未熟だと力づくで木から挽ぎ離されるが、よく熟れていれば自ら落ちるように、命もまた、青年からは力づくで奪われ、老人からは成熟の結果として取り去られるのだ。この成熟ということこそわしにはこよなく喜ばしいので、死に近づけば近づくほど、いわば陸地を認めて、長い航海の果てについて港に入ろうとするかのように思われるのだ」(中務哲郎訳)

実践倫理もまた、老いや死を「大自然の摂理」という視点でとらえます。人は誰でも、誕生から成長を経て、やがて老い、死んでいきます。青年であることも老人であることも、同じ生涯のステージの一つにすぎません。どのステージもかけがえのないものとして、等しく尊ばれなければならないのです。

老いることによってさまざまな身体機能が衰えていくことは、自然のなりゆきです。老人の多くは、かつて「できていた」ことが次第にできなくなることにとまどいながら、やがて大自然の摂理に従い、老いのステージを受け容れていきます。一方、老いや死からはまだ遠いところにいる子や孫は、それを自然のこととして受けとめることができません。そのため、「ぼけ」や老衰も「病」の一種と考え、当事者の意思をよそに、すべてを医療に委ねようとしています。

福岡市にある「宅老所よりあい」の代表を務める村瀬孝生さんは、老人が穏やかに死を迎えるためには、周りの者がその身体の変容に「沿う」必要があるといえます。「添う」ではなく、あえて「沿う」という字を用いるのは、それが「川や山など自然を相手にした態度に使われることが多い」からだといえます。「老いた者は自然の摂理に沿いながら死を迎えるので、それに付き合う介護職も沿う態度が求められる」(『看取りケアの作法 宅老所よりあいの仕事』)というのです。

大自然の摂理に「沿う」ようにして、老いや死を見守り、受け容れること。そのためには、人生のさまざまなステージにある者どうしが、互いに学び合い、仕え合い、尊重し合う姿勢が必要です。老いることによって肉体は衰えても、それはちっとも惨めなことではありません。老いを「惨め」にしているのは、当事者ではなく、老いを理解しようとしにくい周囲の環境です。私たちに求められているのは、長い人生の最後のステージである老いの価値を見直し、そこから虚心に何かを学びとる姿勢なのです。